

ごあいさつ



ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏が「もったいない」という言葉を世界の環境問題解決のキーワードにしよう、と主張しているのは有名な話です。日本語で国際的に使われるのは、このほかにも「津波」から、ご存じ「カラオケ」に至るまでいくつもあります。

日本が国際舞台で何ができるのか、何を（他の国や機関に比べて）よりよく実行できるのかを考えると、日本語でそれを最もよく表している言葉は何か、というアプローチは役に立ちます。笹川平和財団（SPF）がこれまでとり続けてきた手法も、これによっていることはあまり知られていません。

その一例が、プログラム・スタッフに求められる資質としての「思い込み」「思いつき」そして「思いやり」です。特に「思いやり」というのはいい日本語です。優れたものが劣ったものに同情したり、強いものが弱いものを庇うというのではなく、自分のしようとしている行為が相手にどんな影響を与えるかを同じ目線で推し量るのです。英語では、「empathy」が一番近いでしょう。しかし、そこにみられる自己と他者の二元論的な概念の影は、限りなく薄いといっていいかもしれません。

同様に、「世の中をよくするのではなく、よくする方法を考える財団である」という自己規定も、「汝の欲するところを人に施せ」ではなく、「汝の欲せざるところは人に施すなかれ」が好ましいという、ポジティブリストよりはネガティブな定義を選好する、優れて東洋的な発想と通じるものがあります。

「日本語」を「アジアの思想」と置き換えても通用する人が多いと思います。これは、かつてマレーシアのアンワール・イブラヒム氏の唱えた「アジア・ルネッサンス」に連なります。たとえば、仏教の修行法である六波羅蜜は、東洋思想としては珍しくポジティブな行為規範を6つあげています。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧がこれですが、忍辱すなわち辱めに耐え忍ぶことを積極的な徳目にあげているのは面白いといえます。本当にこれができれば、ミャンマーも民主化に向かうのかもしれない。

SPFもいよいよ来年で創立20周年を迎えます。どのような日本語で、すなわちアジアの思想で世界に向けて語りかけていけるか、皆さま方のお知恵をぜひ拝借したいと思います。

笹川平和財団会長 田淵 節也